



類類發句集秋部

七月

蝶夢編

立秋

秋暮と書月はるら萩老聲
 ひりくし木はて動く秋をい
 来り秋風はかりてもかかり
 悔たのわらぬ骨は志老の色
 秋の川や中よ吹く雲のまゆ
 帷子か老屋の川うやけさの秋
 秋の色もほそそとめをうりへ

室頼
 完黄
 北枝
 萬海
 尤次
 尚志
 支考

初秋

毎年の初秋一秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは
秋の初秋と云ふは

秋一
徳元
明水
菅菴
尚志
光貴
すき
芙蓉
浮木
山川
風徐

一葉

相の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水
秋の葉も波分りて井戸の水

徳元
明水
菅菴
尚志
光貴
すき
芙蓉
浮木
山川
風徐

柳散

葉のちりちりや
ちたれをたぬる
さかす、おの
ちり柳を花

三風
去芳
老士
葵舟

楸散

桐燈籠

高燈籠を
山寺の
人鬼
高燈籠
掛符

去那
称
言水
蓮之
脚風

攝侍

硯洗

七夕

あつた
掛符
硯洗
かき
七夕
初小
笹葉
輝
七夕
月入

去留
後仙
心法
桐節
芭蕉
去角
猿籠
虎芳

乙の川

河合や松のさやぐ秋の声
乳を交はれ先や星のあきら
七夕や人より志の夜もあきら
指さくく星の影をいふ夜は
文りや水田の影と星の河
り月のさやぐ秋のあきら川
去夜ややゆりかそらと天の河
大切な秋のあきらりり乙の河
あきらめはしてあきらめ乙の河
あきらめはしてあきらめ乙の河

芦木 乙由 老士 木尻 性隆 如川 岩重 乙南 山隣 階涼

秋三

鶴の橋

秋の系

立琴

芋の系露

二まじりあきらめ秋の河の川
松風や秋のこむきや乙の河
乙の川 東へはまを志るる
橋のあきらめ鳥あきらめ夕の河
かきくれや橋も一夜のうけ
はら合や鶴女も秋の系とん
色くく深あきらめ系乃秋の
立あきらめ秋の志るる乙の河
立琴やひいて恨衣敷をいん
次すもくく月と秋りり乙の河

文系 門松 康工 其角 松舟 可風 西羊

武蔵

梶の葉

梶の葉もや表の葉の如く

由平

梶の葉もや古や軍の如く

宇冬

七夕鞠

星の如く空をゆく鞠は

作老知

送の峯入

峯入や松老峰も吹立ふ

馬六

運送

おとひく物とあつ、運送

嵐雲

盃蘭盆

盃より酒を飲むは

富珍

盃の月

盃の月と酒の味は

榎子

盃の月

盃の月と酒の味は

由水

盃の月

盃の月と酒の味は

句定

盃の月

盃の月と酒の味は

李由

秋四

盃祭

盃の月と酒の味は

御披

盃の月と酒の味は

李吟

盃の月と酒の味は

去来

盃の月と酒の味は

嵐雲

盃の月と酒の味は

其角

盃の月と酒の味は

丈草

盃の月と酒の味は

野坡

盃の月と酒の味は

酒中

盃の月と酒の味は

北枝

相經

魂才の紫羅の女衣は青に
けなぬ親のふくや雪ふり
きふ奈ゆりくさふ灯をさ
亮柳や神武ひまぐ著く
土器をひく乃こそや亮奈
魂乃て猶よ見えへし佛さ
たま柳や灯をけし入子の親
亮柳や隔りぬのちくおくら
柳院やまゆりやとやと枝第
柳經やあいきりもかへり

浪化 氷花 薩守 温故 忍尺 宰陀 源秀 如行 宗結

蓮飯

松の葉よりつむむの枝蓮飯
親の枝よとけし果や柳麻木

一飯 支考

麻木箸

あぢ人ぬ殺と麻木の箸
あぢい箸や麻木の箸は

金峯 也折

菖草

菖草の枝よけし柳洞那
家あぢい枝よ公婆の墓系

梅氏 柳妖

墓系

尺へも孫子と来て墓より
灯籠の外は墓人よおとん

志来 一笑

生身玉

生身の方のあくさくや養来
 蓮之
 虫のまゝ宗有くや養来り
 乙徳
 せんく急の骨よるをせ生身玉
 方山
 生身玉酒のさくく親父
 其角
 焼養了あつて目出く生身玉
 支考
 ちねまふふるく宗や生身玉
 汝村
 蓮系もく起在の焼よる
 木因
 送り火や安婆の思れ煮子
 六考
 の、巻く蓮の系持るあくれ
 玄南
 送り火やおひくくり独り云
 梅笠

透火

透火

大文字火

舟形火

送り火やゆきひ蓮も水の上
 杜若
 送り火や安婆も送り火の系
 巨師
 大文字や一葉山は保る先
 饒爰
 妙法字や松崎よ生身玉
 友若
 煙と焼く大形もや秋の風
 火官
 舟の火は消ゆくも如月の海
 比叡
 見るとも四つ焼養は海りり
 其角
 ふと梁の久しう送り火切養は
 尚心
 同一灯と切養は見ると表あり
 木因
 送るく、秋あまの焼養は
 嵐雪

躑

度々家の蛇籠衣下月夜に
見らるる子掻きさせぬ蛇籠に
灯籠より夜の御衣小法師
吹きておとけは乙女如く
踊り子の歌と背り切花に
一より待人遅れとせらる
我の心は川小通る踊り那
小娘の生されとせらるけ
明女はくちの赤衣を踊り
茶を煮か乾一斤煮とせらる

未陌
所取
巴静
司館
玉尾
尚白
万平
其角
文彦
三将

秋七

解夏草
地蔵茶
書文入

过踊り一踊りく丸小朱
朝夕よみ子見う乾踊り那
踊りや赤衣の娘赤衣の中
踊りや秋の衣とせらるけ
好くお男よ朱とせらるけ
我乾り惚く文の踊り那
舞夏草やとせらるけ
化装く地蔵茶や赤の過
やふふの疾く赤衣踊り那
教入や舞夏草とせらるけ

約登
了人
連之
高波
長明
観道
相雨
寒玉
許六
泉斗

花火

け次多くとちよ玉火火
一あゝ花火万もふ文光火
瓢うう約も電弁表火火
却もも位すーとらりお撲
角力取らぬや秋衣うう後
よ此衣のこと補やすふ取
下帯あえ中あれも系お撲
十八とソ川と昔ふ角力ら
書く最後生れひや中ふ取
築詔うふらよもやすふら

神叔
其角
七里
去来
元空
其角
許六
汎休
史邦
山峰

秋八

相撲

扇置

扱らぬと礼と遠入る角力
傍してその敷居にお撲取
角力とら依疎の先よ海ふ取
付くと法と見る秋の扇置
扇置秋衣は破し扇置
秋の風おれは破し扇置
相撲美の撲く見ると乾葉
引くふと川うう扇置
相の葉乾葉ととと川光
きよくや敷の巾ち和あり

立吟
涼菴
冰花
小春
奉巻
尚ふ
唐先
扇置
子川
具葉

捨置

初嵐

秋風

たつ風瓜番の家きえより
あしくや日あつ風あくと秋の風
秋風や萩も細く不破歩聞
牛坊登り飯の遠弱く秋の風
うららるとぬ市初る書や梅のうら
梅風の吹くよりうららぬ秋
あそびまふ海もあそび秋の風
秋風の心もあそびぬ秋の風
あそびまふ海もあそびぬ秋の風
あそびまふ海もあそびぬ秋の風

信子
芭蕉
秋風
冬
嵐雪
春
智良

別立しつり暮り秋のまを
約針やなかりうらら秋の風
夕顔の実をくちり梅の風
あうらやや風かたのあそび
何ありとわたりし秋の風
秋風や橋より出く橋より入
とせとまゝ何よあそび梅の風
秋風や萩ありあそび波のま
秋風や子なきあそび秋の風

出翠
正秀
外高
越人
与馬
万子
結通
子那
許六
希因

夕子入

冷

秋暑

露

夕子志也や宵曉の舟志あり
徒らしとつり風者志都る
冷くし聲とゆきゆく雲
梢より暮るあり秋の暮れ
やくそくの秋ありけと暑
秋もほろほろあり
ふもやせふあたふ置所
於あや枝の叶と芝の起より
夕子の暮れ枝ひわりと家の金
ふはゆや指りて暮る雲のふ

其角 芭蕉 支考 曲響 乙由 雲周 去来 風雪 若草

霧

胡あや我鼻新少半老古
草の霧風よそとつり
夕のふと似く似ぬりの花
名月の暮れありけと夕
物多つりの花一色よつり
朝露や布下枝と枝人老都
夕のふと似く似ぬりの花
帆柱のちるぬや霧の起り
川はるや霧と霧の霧
朝の露や霧の霧と霧

新口 脚更 之向 北溟 可也 深美 若角 小枝 可也 之室

縮書

胡堂や何名を言ふ事あるに
影如くや光来あくるもの事
縮つるや圓の方づく己の聲
縮書や海老西のひらひら
いふ川まや起りぬる東まきと西
かれつるのかまませるひの雲夜は
縮つるや二本ゆくとむ小松原
いれ書やわたりわたりてきま
縮つるのよけくさぬお山の上
縮つるや終る目のまき雲よ入

^{王座}胡堂
^{秋平}不文
色道
具南
春末
和及
横豊
文季
山夕

秋十

縮つるよいつく事ありあけ付
いれつるのまへに和や休の事
いふ書やいつたり事とありを
縮書やうけとてきとあのお玉
縮つるや縮るもあけを縮の上
いふはゆや石山寺おとせ中
縮書や善てひるやうは笠の上
いれ書や山を原をせんぬて川
いふつるやと縮とたし袖入
縮つるまや何哉落して水の足

胡堂
不文
色道
具南
春末
和及
横豊
文季
山夕
胡堂
不文
色道
具南
春末
和及
横豊
文季
山夕

草花

草をくおのく花乃より
知哉笑くおのく凡古のや草花
草花や秋志の歌よおのく
おのくにあら若その可ぬ中世
やれ可ぬくのりそ草の花
我もよ咲てもわき草花
そのくお木槿のりそ草のり
おのよの位も似る木槿が
おのよけくおのくおのくけ
木槿の結くおのくおのく

芭蕉
低身
支考
強志
おのや
乙筑
芭蕉
丸索
秋風
おのく人

秋十二

木槿

女節花

海にひの川垣に宛あく木槿が
りく一日くおのくおのく
翌日の事笑くおのく木槿が
おのくおのくおのくおのく
一日おのくおのくおのくおのく
おのくおのくおのくおのく
ひのろくおのくおのくおのく
おのくおのくおのくおのく
おのくおのくおのくおのく
小刀よりおのくおのくおのく

乃露
屋元
おのく
おのく
おのく
おのく
芭蕉
涼菫
芙蓉
万子

男節花

多勢外通くぬるや女節花
獵人下立者さうる地ほへ
吹くく公多きし杉下
東中にひららるる女節花
我ありまおもひし地ほへ
志願ふふありてや男節花
秋の舟くく人の名く男へ
つゝらぬ心あふく地ほへ
秋の舟くく人の名く男へ
葉や葉の葉下立の節花

葉本
封ト
涼袋
秋瓜
葉太
斜岩
半睡
年路
秋風
芭蕉

葉

朝の舟くく人の名く男へ
秋の舟くく人の名く男へ
葉や葉の葉下立の節花
胡敵やまの斤ひく一ふ先
槿や秋の葉の何く一持さう
秋の舟くく人の名く男へ
朝敵のあふぬその日く
あき敵の一本もあまきうれ
あき敵の一本もあまきうれ
秋の舟くく人の名く男へ

破笠
史邦
戈磨
十丈
元元
免士
巴静
木兜
秋瓜

瓢

於る所の約瓶をいれぬ瓢の水
あき白如餅を凍てて凍りけ
凍くしてとせりあけぬ瓢
已う菓子片尻けぬ瓢の那
汁立の極く遠くゆくへ
さひとぬてくは瓢をゆへぬ
焼やうの模範をいれぬ瓢へ
きふも又ゆててくは瓢の丸
吹礼の目鼻をゆへぬ瓢は
舟の果もあけて記さるくへ

子代 也有 扱妖 涼菴 許六 風草 園輝 己筑 丹後 舟子 秋十四

萩

盗人跡を定る川を萩ゆへ
ふ赤もあけぬ萩の萩ゆ
あうりへもよるも萩の萩ゆ
山萩の涼休ぬかきりぬ
まうりともかきりぬ萩の萩
萩ゆもあけぬ萩の萩ゆ
ふ萩やあけぬ萩の萩ゆ
あけぬ萩ゆあけぬ萩の萩
下移て置直りぬ萩の萩
白萩やあけぬ萩の萩

青岸 芭蕉 舟志 言水 李由 禹洗 系 野人 文素 秋風 葵太

萩

ふ萩如きふ家も花の萩
秋風の口も似たりや萩の萩
萩の萩やけりけりして後の音
おくやふ白よさう萩の音
けりけり強いくえ萩の萩
萩の萩やきけりけりけり
をよきく白ひてけり萩の萩
萩の萩一蓮も異一園萩を
萩の萩とあけけり萩の萩
詩をけり萩の萩

萩二
季吟
尚公
雪芝
幸平
餘夏
已辭
文素
平砂
周年

葉

夏袴
芭蕉

う園と萩比る川や萩の海
舟と舟の帆と萩の芭蕉は
とて萩の萩やけりけりけり
はせとてや在るの中けりけり
己合はけりけりけりけり
破れけりけりけりけり
小車や萩の萩の萩の萩
独ひも天をけりけりけり
花枯梗は開きけりけり
秋はちけりけりけりけり

友浪
一品
乙女
高川
可風
芭蕉
母雲
露川
風色
方次

小車の花
枯梗

ひよこの国のついで破らるる	乙舟
梅枝のふ咲時をんこ云々	乙代
粟の突孔のまやまの意の草	乙抄
死東州をまらわらう南力草	乙由
畑う枝をまらわらう命の草	左迄
秋の日成草をまらわらう仙舟花	七雨
瓊瑤色よ咲てらるる草	李溪
菊草二百十日と志水	苦栗
焼くくやまの塚や蔓珠沙花	深菟
松の焚枝もあらわんぬ志水	可磨

灸花	やいゝ花子皮のひのう枝より	斗周
子日お	子日お千種まつてお花より	恭國
蕺菜花	花蕺菜きくや扇の口をれ時	後五
刀豆	刀豆や七日八日の月を取	甲仙
樽金花	総すんや草を切らるる地	三四
益母草	益母草りも花をまらわらう	免費
西瓜	目もまらわらわらう意の草	清漢
	西瓜も流るる安達もまらわらう	其角
	西瓜も奴の髪をまらわらう	許六
	妻もすんたがらわらわらう	

番椒 緑瓜

出女名に於井にむ瓜瓜瓜
あけきぬは海と抱く瓜瓜
造人のあつちして外西瓜瓜
滝臺のひよととあきく瓜瓜
ついであつちして外西瓜瓜
名々層もまた歌はゆる衣衣
月文くへちのわや雲さる
あくてもあつちして外西瓜瓜
石巻とつち振あつちして外西瓜瓜

支考
云来
龜孫
治之
珈凉
長和
休賀
芭蕉
木節
坪坡

木瓜の実 蓮実飛

早稻

度うりー茄子の朱よ本集自成
高那板の仕給あつちして外西瓜瓜
ゆれりよ歌揚赤く夜うりー
うりーん色あつちして外西瓜瓜
あつちして外西瓜瓜
木瓜の実やまあつちして外西瓜瓜
蓮実飛や鬼へハ蛇のあつちして外西瓜瓜
蓮のこら蛇あつちして外西瓜瓜
まは歌実やあつちして外西瓜瓜
子稲川く屋つちあつちして外西瓜瓜

来山
四芝
露川
宜胡
波路
雙文
猿鉗
苦井
抑几
乃龍

焼禾
秋の致
秋の蠅

いさかひのつらみくや子婦の
 新いれくくや子婦の早稲地り
 子婦も種は出く大串の糸を
 焼禾や麻きく人下き子
 秋の致や忘れ時製秋の雨
 秋の致や色くさうく虫を
 あれの致や友の滅びを法とら
 秋の蠅子とめく退りぬ
 いくはくそ日雨退ゆく秋の蠅
 る子尾はゆりけりや秋の蠅

芙蓉
嵐
林
木
四友
文
呂言
野
琴丸
虚白

秋の蝶
種
秋の蟬

怪子のかきぬきくさう梅の蝶
 井くれ交る子と胡蝶走りぬ
 ぬく川とら花く俳一秋のて
 秋の雨も子かを影るやう秋の
 ぬきうくと燕く死つ種
 秋の雨も子かを影るやう秋の
 ぬきうくと燕く死つ種
 己ら理をひつらてや秋の蝶

と考
和及
可風
山
雨
声
一
笑
文
山
人

鯛

蜻蛉

いづくとも方の家おくや秋の蟬
泣くも錢はひらぬ蟬の蟬
秋のせと泣くもいづくも
日くもや換くまでかきうと
鯛や山田武蔵守水忠重
夜半の蟬あまのりく月夜
日くもやまの蟬と替り付
幻の秋夜川と水と赤蜻蛉
蜻蛉の歌を大く目玉くれ
幸山や蜻蛉ついでにいづく

文素
秋水
杞柳
すそ
祝介
有琴
里桂
支考
智足
秋之坊

松虫

栗虫

蛭頭

蜻蛉の蟬と抱ゆぬ日くれ
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり
せん海老河の末あまのり

治若
探丸
近
江雨
許六
巴静
石柯
支考
松守
昌助

蟋蟀

ふ髪ろく枕の下や起ろくは
おけけく夜もゆる寝のまじり
ほしのあけぬ夜掃そ起ろくは
灰汁桶の字やまきろくは
まのまきり起ろくは
葉のまきり起ろくは
桶の輪や起ろくは
まのまきり起ろくは
おのあやまきり起ろくは
ほろろ子も夜も起ろくは

色蕉
まきり
北
高川
飛舟
昌房
舎野
俊吾
無洗

棧藏

妻家のあはれ山まきり起ろくは
嘆や灰汁桶まきり起ろくは
まきり我も壁より起ろくは
新ろく人まきり起ろくは
ま院ま棧蔵まきり起ろくは
棧蔵やまきり起ろくは
ま棧蔵やまきり起ろくは
ま棧蔵やまきり起ろくは
うのまきり起ろくは

范字
流
以哉
季左
巴静
乙信
乙筑
史邦
十丈
鶴之

當歸

竈馬

弥弥美は老あはれいこ
 千鍾若同かこくた竈馬
 海士の象ハ小海をよゆいこ
 寺海よや款こ免つく杖
 こころたや若く追ひ孫老上
 藤子虫かたや入印の夕日
 もの虫や所う下してつた
 兼虫や敵こ似合く一
 と此虫の啼く杜木の風情は
 川竹やこら音外よ免いこ

昌方 行六 芭蕉 北枝 孤庵 文泉 翠樹 杜若 倒泉 耽徒

あうろた

藤の虫啼

兼虫啼

いふこ

虫

ひつ虫田り来く蜂るいふこ
 多さこく音あくら一虫の
 ひ水虫旋形形むく此色
 虫くむく啼く周縁あふ
 雨さむく子よ志川虫の声
 遠せしり驚進ん虫の
 登根まく款時々の夜や虫色
 虫くもの表試つて夜中
 燈のほく洞よまも虫の
 啼虫のまある方をたつこ

風子 芭蕉 乙女 怒風 玄梅 李由 勺室 正秀 小 かつ

虫籠

七賢ある今の子の部や虫の如
きのの焼るをさう低く虫の色
ちりあがりうまき虫の如神

改志
素味
老古

秋の、枝より提てり虫籠に
虫籠と受く祝神とあつひ危

貞位
免黄

虫提

秋あらし提然きり虫の如

貞位

虫合

お茶の川も堤崎の虫あはせ

朱湖

虫受

秋一葉多の葉受の葉の如

外様

鳩吹

鳩吹の川吹り秋とさきり
鳩吹や堤柿系衣葉受畑

酒也

鳩吹の
鳩の吹

鳩吹や堤柿系衣葉受畑
鳩吹の川吹り秋とさきり
正の老若かりと鳩の吹別也
心身成やと免く鳩吹あられ

羽舟
若種
史部
千那

八月

八朔

八朔や一町り焼るついで

園水

八朔や彌々夏かこほり

乙由

八朔や夏の上も種もあふ

舎采

田雨の日

晴うらと田かこも種も田雨か

心只

松竹器
放生會

松竹器
放生會
礼り事なる事なる人なる放生會
尾なる事なる事なる放生會
體なる事なる事なる放生會
心在や藝とつ事なる放生會
何事なる事なる事なる放生會
あそこの事なる事なる放生會
とそこの事なる事なる放生會
う外人の事なる事なる放生會
月教と波あかしの事なる放生會

松花也
寺吟
葉碎
乙由
色蕉
文考
已百
貞徳
主團

三月月

月

月とや一梢ある事なる放生會
来跡さにおのけ御起月夜
我翁とく系よんをとりと放生會
岩堀や交りあはし月夜の密
おろくと起るは月夜の光
分おびと起るは月夜の夜
酒飲り足さる地あり水ある
聖なる事なる事なる放生會
外人と起るは月夜の光
待宵ある事なる事なる放生會

芭蕉
昌碧
素書
去来
初月
露川
寺吟
飛黄
中残
文考

待宵

名月

侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程
侍月とよ山妻せく如きの程

牧亭 柳坡 系松 尺松 湖春 芭蕉 信位 木岡

名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影
名月や夏の上り松の影

其雨 嵐雪 奈未 文子 去方 許六 木節 涼菴 与考

名月や夜を然る日もよし
名月や秋の夕陽に
名月や西の空に
名月や富士の峰に
名月や虫の夜に
名月や山に
名月や花に
名月や松に
名月や竹に
名月や水に

秋風 裁人 知行 素庵 杜若 梢風 孝由 轍士 酒半 希園

今月

名月や掃き
三井寺の門
名月の月
名月の月
富士の山
名月の月
名月の月
名月の月
名月の月
名月の月

松の影 芭蕉 露水 言水 支考 朔月 山峰 乙由 忍尺 梅猪

月見

雲影くく入夜をさし月見が
歩れつる子をほめて月見が
音くらゝ煙のかしは月見が
舟引の道うさげは月見が
川もひ老畑をあらは月見が
ちるまの歌は月見が
麻うた踏打る春は月見が
向のよは家も月見が
飛入老あつと月見が
何ふ文は夜更の果も月見が

色直
去来
文孝
牧風
文孝
浪化
菅良
正孝
老貴

各月雨

十六夜

降るもくは宵より月見の雨
るの月何はも外に降るら
雨やに衣通作やう月見
いさひも月見の歌は月見
やもくし出くは月見の雲
いさひも月見の歌は月見
いさひも月見の歌は月見
いさひも月見の歌は月見
いさひも月見の歌は月見

尚念
越人
春波
芭蕉
太来
太来
大芳
近
野お
佃坊

初潮

初潮や船に乗り帆上げ舟
初しはやうるの浪に花柳舟
まへへかや貝のしらけく内相
は山嶺や小妻お中い月の歌
飛し保やあゝいづれ七神の石
あはしくもあゝ海ゆく世分り
後とくもいづれ世分り
何奴と世分り小妻お中い月の歌
一番りりお山子とあゝお景
船中尾りつりぬお景分り

出葉
凡北
柳舟
乙河
休母
穰穰
芭蕉
雲水
許六
前口

野分

冷くと朝日さつりお景分り
比敵なく次々さつりお景分り
小系女や船に乗りお景分り
徳持のしら海とさつりお景分り
ゆんともお景分りお景分り
お景分りお景分りお景分り
お景分りお景分りお景分り
お景分りお景分りお景分り
お景分りお景分りお景分り
お景分りお景分りお景分り

支考
言水
その
承元
九部
柳志
東眺
五朱
津香
素因

乳寒

乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相
乳寒しやうるのしらけく内相

素因

幽香

秋のや、乃りりてうらやましく

許故

幽き草、哀より大なる秋の寂

韻考

句、さびしき草中、秋葉、挿あり

天堯

冬、雪より、花子の花も、挿あり

死園

すくも、もかくく、中法、うらやま

松山

秋をわ、手紙、秋、秋、秋、秋

晉九

朝をわ、雨、雨、雨、雨、雨、雨

青湖

朝をわ、雨、雨、雨、雨、雨、雨

再考

入道の下、秋、秋、秋、秋、秋、秋

芭蕉

友と、秋の、秋の、秋の、秋の、秋の

文章

吟

夜寒

秋夜

木枕より、秋夜、秋夜、秋夜、秋夜

秋夜

川、流、流、流、流、流、流

心斎

友人の、夜、夜、夜、夜、夜、夜

程已

葉の、後、後、後、後、後、後

怒風

生、望、望、望、望、望、望

李由

の、書、書、書、書、書、書

素行

赤、減、減、減、減、減、減

汀草

郊、外、外、外、外、外、外

大川

谷、心、心、心、心、心、心

巴靜

一人、心、心、心、心、心、心

跨山

約亭

瓜敷も旅のまゝ約亭へ

高平

約亭や岩おたたく新松山

其角

あふむへ巻坂より登山

正秀

口あふまき家々く約亭へ

曲璽

桃焼より遊ぶの流やあふむへ

許六

山下やまき家々の志山や約亭

附尾

まふまふは彼巻おまや桑家

范亭

後生も実の合秋のひうん

如白

出代や曲突よりあふむへ

許六

おふむへやけ巻も桑家とあふむへ

宗毛

出代

彼者

二百十日

二百十日一日せりあふむへ

七里

好もたな寄り二百十日の

好如

八朝やま理子歌あふむへの

超波

おふむへ酸ふ徳のうらわおふむへ

与秀

いふまゝおふむへ雨やふむへ

其角

條やおふむへあふむへおふむへ

九十

襦山や鳥の中よりあふむへ

可風

まふまふおふむへおふむへ

其角

松のまふまふおふむへ

木卯

おふむへの横よくおふむへの

其角

亭

芙蓉

枝より花日少くかきぬ芙蓉也

近蕉

常雨の空より芙蓉のそよ風

川ありて秋風さよふ芙蓉の舟

園解

そののゆかり花を散ゆふら

其江

木犀の花

木犀や白ひ色くくわゆる

如舟

月をみぬ秋をくせいの後より

園入

物あはれつらして見る葡萄の

杜栄

あまらうらなうらうら葡萄

茂秋

心憂う味の付らぬゆらゆら

文素

何れにもとあひのまら花の

文字

葡萄

花野

秋三

薄

又安り道はらへ花野は

玄梅

秋のよき色のるに花の

文彦

おはせくつらと通る花野は

理玉

あはれと蓋ふた志のり

素海

八月のきり花うらむ村より

不角

押きてる水ある薄は

北枝

約買り出むる冊のきり

那明

三日月と大い光る名を

素子

くひましく葉も似る薄は

その

花野の角より川を流る

為有

花薄

秋の夜と花ひかりし花の
 編つるし流くおとす花の形
 花のひかりの末の影を花の
 花のひかりの影を花の
 花のひかりの影を花の
 花のひかりの影を花の
 花のひかりの影を花の
 花のひかりの影を花の
 花のひかりの影を花の

李由
 電芝
 車磨
 其角
 嵐雪
 許六
 久考
 素来
 本忍
 篠原

秋花一

かき草

花家
 花の光

たんこぶ

紫苑

露草

葛

かき草の伝承は...
 七尺より尺を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影
 花の影を花の影

梅堂
 岩屋
 二平風
 草吹
 柳居

昔の花

落る秋石とわらうやきうつ
昔花もの秋よさぬ木もかろ
花のよき水よきくまのふ
もやくとて静くや昔の花
昔のよき水よき花よき
花よき故人よき昔よき
花よき昔よき花よき
花よき昔よき花よき
花よき昔よき花よき
花よき昔よき花よき

治天

巴静

宗内

山府

朱杜

艾川

松橋

新鶴

巴静

珠明

鳳仙花

枝打石よ蕭のすくゆる鳳仙花

杖世二

野菊

鶉歌花

鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
枯の白よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く
鶉歌花の房よ来つ時秋赤く

芭蕉

万平

与次

車番

村江

里冬

宇麻

巴静

可忍

空園草

酸醬

ほろふと実も紫もかきおき
鬼灯や才坊と名喰くこり
なつまやかくまてふ秋の浦
海はまやこぬ根は口中
まのあつくにまを織り
後色く花もたむか居る
紫結ぶらんか念の嘆か
秋海棠の瓜の色よ嘆き
手拭りおの付くや解海棠

芭蕉
乙由
百寿
魚波
鱒麦
春亭
風草
巳雲
芭蕉
支考

秋海棠

紫鸚鵡
湯子

鴨上戸
沢橋梗
葵の花
苗葉実
冬瓜
冬瓜
種蒔子

物語り何成てもあや秋海棠
解海棠の粉水衣か
形分りもさかぬひもよ
子乙女の指くや
習仲く野山屋の境や葵の
実のあつた葉の影あや
桂垣よりかき出
冬瓜や葉えり
かきと二の海
種蒔子

任法
香部良
鴨上戸
陸奥
葵里
浮流
冬角
相雨
不止
方堅
麻文
免費

種梨

ふろく花をむくうた子梨
たけは名はさうも有る種あり

凡北

特分根

根を分れた牡丹や蝶々その口と

如中

芋

芋引やゆり月とむな芋水

山川

芋の多し月待重のわけ畑

伊勢

色蕉

芋の茎

経度くたきくくんまい

白哥

ぬりこ

葉の多し茎を抜くぬりこ

芭蕉

多し芋水よりぬりこ

那徑

稲埦虫畑く葉をむくぬりこ

為有

牛房引

牛房引やゆり月とむな芋水

鹽水

薬垢

ふりや冬虫つらふ葉畑あり

尾法

心秀

節の多し下や葉をむく葉畑

巨橙

木賊刈

月乾たふん葉畑より木賊刈

但

圓危

節くの多し葉畑や木賊刈

己千

木綿取

木とて取生約の山々田の色

其角

山垣の跡より種の色をぬり

泥豆

若烟子

綿かろくちたつて香や若た

尾法

祐山

また二改下一ふくの灰と葉

瘡世

乃枕菜

乃引菜の葉をむく葉畑

知豆

菜島や二葉の中れ葉の色

尚公

苺子爵
稲の花

けりまわ種うゝ風子散やんま
ふ家の采と事うういさのむ
笑より葉もおや稲やんま
才のく葉山子も低し、孫の志
さ見くともあつとら稲花
き波子つ、たぐふしつねの志
う歌りしふ稲の種をしの物り
種よあく在中あ田も晴も分
神の教珠かち信家高種は
駕昇も道張すけらるる不

落穂
稲の種

山南
露川
梨節
馬吹
味友
踏通
嵐宮
水邊
龜野

秋也八

稲莖
稲垣
毛見
田川

粟
稗
黍

辻事へ投込くり産種は
稲草一あをいの園へ産され
稲垣や林十分り志らるる
井しらの毛見やふらりあまら
神社と接かくりと秋川種は
尺のうちよ畔るまきく切りか
稲うらや山子の強く頂て
粟の種も約くゆうく見られ
稗は種のも違へたふ葉色は
とまひや別くの萩乃ら遠へ

草南
李由
一桂
大毫
山川
秋風
起毫
素氏
数人
芭蕉

蕎麦の花

三月の地を焼くそこの花
靴大のちりけくこや花この色
蕎麦の花様の志賀のあつし
花蕎麦のうたの後の蕎麦
大根と薄くしき蕎麦のこ
新蕎麦
新蕎麦のやけいやくと夏は元
この花こや花 個本木の大根
新蕎麦のあつし蕎麦のこ
蕎麦のあつし蕎麦のこ
蕎麦のあつし蕎麦のこ
蕎麦のあつし蕎麦のこ

芭蕉
荒花
乙妙
反考
苦難
反考
周如
心考
枕懐

葉山子

あつしきく一役ありき蕎麦
種と好儀やまくに蕎麦
つるりと川を流る蕎麦
釜ぬげく西目も蕎麦
乞食少も蕎麦
子枕も蕎麦
一俵も蕎麦
居風呂の下や蕎麦
雲州の釜も蕎麦
欠風りひも蕎麦

凍菘
、
祖休
、
破笠
、
舟休
、
反考
、
文章
、
他考
、
枕懐

鳴子

山里あき鷲うららけ葉山子
あき霜り一季つ先く如く
綿糸下り終後ぬる葉山子
鳥さへおほくくと鳴子引
七十の梅もそろはる鳴子引
胡蝶あかぬるあき鳴子引
あき中も鳴子あき子さ
あきぬるあき生れてわ鳴子引
あきのうらあきと迎も鳴子引
谷あき鳴子の綱や意の中

温故
あき
伊豆
已百
横琴
其角
天竺
紙外
向次
津老
文章

引板

あきあきあきあきあきあき
布中下り柿一本あき鳴子引
あきあきあきあきあきあき
文山の庵あき引板あき
夕つまたあきあきあきあき
林あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

徳吉
史部
結通
文系
近江
不玉
昌秀
大虚

流水

焼帛

落木

あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

大虚

擣衣

今冬とくく岫岫へ擣衣露水
徒らりの鳥籠と集りて居る水
陽子田んぼくく下りて井く水
林出くくくくや懸く支石く
母の目へぬぬくく川きくく
折くく鳥籠くくくく石く
子の泣くくくくくく石く
猿引く猿の小籠とたたくく
招き木のまはくくくく石く
露入りの虫歯まひく擣衣

風毛
鳥我
蘭圃
如及
那坡
尚公
山川
芭蕉
不卜
涼菟

鶉

古川の火燧ゆくく地をぬく
昔れ雀の軒ゆりあむ石く
十くくくはわめくくく石く
家系の擣衣出くくくく
石くくく我者かうく石く
くくくくと擣くくくく
月報もくくくくく石く
鷹の目もくくくくく
物かみくくくく鶉
栗の極みくくくく鶉

牧屋
立志
季末
芳秋
蓮之
己菟
梅富
芭蕉
文考
惟菟

鴨

かきくこつ川も藤敷の勢
鳴きもほくろへん勢勢
百舌もきけたるよあく勢
なまけりし海へてと時勢
牛河もそに鴨川もあけ
鴨立く日も藤敷よあきり
鶺鴒く一ましと文系下り
かしくらと並く鴨川もあけ
はるあつそつと味し鴨声
鴨川もあきりそつとあきり

鶺鴒
文系
尚公
氷花
柳儿
虎士
嵐陣
鴨凡
秋北丸
丹後
鳥居

燕帰

初雁

初雁

雁

二羽て車も十羽てゆき雲のれ
雲やゆりうきまはははとや
五五五初雁多のねうれ
初うらや比良て追つ帆舟
舟も舟も帆舟も舟も舟も
舟も舟も後り物とくそ秋も
舟も舟も並くつとつとつと
舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も

巴辭
涼袋
三氣
木香
造望
柳石
矢代
去来
猿鏡
矢考

小考後

稲主より小田をかくまひ小田の丁
乃子孫をいひ合はせしむる事
丁の後又送致せしむる事
〜知とよまらぬ事
舟の焼く事少く討ち取れし
道中やあつて入出の所
舟の焼く事少く討ち取れし
乃の事少く討ち取れし
夕浪や山の事少く討ち取れし
船ありし事少く討ち取れし

毛統
李由
之甫
彦賢
涼菴
牧童
乙由
車登
佐史
奈来

秋四

色考
物考
採考
苗考

あぢくへあゆ〜てあぢくはらり
紫葉〜つ〜や〜
持提〜踏〜
山鼻や〜
〜
け〜
色〜
板の〜
青〜

涼菴
支考
吾仲
文字
梨一
兼山
忘之
山木
芭蕉
敬水

山雀 四十雀 頬系 鶴鶴 目白 ひ日 粟穀 連雀

山雀のつらさやわげらう三編のふ
老の杖より初らぬ四十雀
老松の有りともあつて四十雀
夕日また老松の赤のうら
せにともわくつてこもらふ川系
在中の鶴鶴の尾松はも
押合く焚杯より目白が
指竿にあつて鶴のあつて
おしあつて老松のうら
連雀やひらう老松の印

老士 徳元 色蕉 拍掛 氷固 九兆 飛竹 水色 柳花 葉木

杖四十一

啄木鳥 けくこ 豆平 鵲

木つたのへまらうり 藪老松
木はふやん種 きのき井
きぬる 杉の も松と啄木鳥
つこなく老松の松をのり
豆まき 早 小松日南川
鵲やわら日さ 小松系
百舌あく木老松討れ
鵲やわら日さ 小松系
将忽り 遠きさう 老松の
百舌あくや 藪老松

丈草 木兒 五芝 万子 文考 九兆 赤川 野水 他老松 若芝

野草莖

草莖下り流中流の舟ちり

舟坡

小鷹

二月月や奉ふむ小鷹より

之川

荒鷹

荒鷹れ羽風よりく竹影

杜國

鷺

太刀魚や平家況るわさ

若丸

太刀魚

太刀魚や彼の至ち取名の上

緑水

河原

毎六つりかや浪の下むま

色蕉

川

川きつれく平家浪の原

涼菖

とせつりやへりまふ赤心歌

行三

沙魚釣

沙魚つらぬ水村山部酒旗の風

尚空

江鰈

貴人も羨ましくもくわの巻

直舟

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

初鰈

初鰈初網代の旁者強りより

支考

落船

さひして船をひき水の底

如竹

ぬけや交りたよの頃感の船

重頼

落船や目も水もあま

^に子代

水音も墓もあまや岩梁

^に防死

ゆりも船無のともや崩れあ

^上丈草

に音うり月も浅くく山も深

^三三巴

あま又死の薄き竹や崩れ梁

^三葦水

せの中は遠入よとや船の危

惟恐

追とく危とよゆん麻のあ

北枝

多てかぐる角のあらや麻のあ

鹿 蛇交

秋四十三

鹿麻と麻と折る草もつらひ

抱膝

茶のりや宮土吹くる麻のあ

公未

仲伝うや小萩りりり、蕨萩角

、

いんと啼鹿あ出り夜を忘る

芭蕉

南大門連三ましてや鹿のそ

正秀

しらのあひあす時角くひり

味美

麻のちろれひあ枝のあり

、

猿あ後中斗りり、麻女名聲

荒桂

鹿もはり英明の鹿やひの言

凡睡

小男荒やあ交あすけい

真南

啼きしむる月夜に
ふりそらと月夜に
振とく存る
伸とる腰
小貫とる分限
床のたう
鹿の子
一とる
春の
春の
春の

文子
汶村
野明
晋九
系怒
乙由
老士
春波
乙筑

秋四十四

麻笥

鹿田

九月

暖やあけの
若啼や
麻笥の上
若の苗
その毛

津山
桂
樹水
元令
梨明

重陽

まふと東て
余の
かりげ

二水
如及
文子

栗の白

栗の酒

栗

猿も木よよつて栗の皮白く
子の声や囀るは栗の酒
二盞うら白ひみちる栗のほ
被たうらつり栗の香は
もかく咲け九日とちり栗の
然しの秋とやう栗の皮
栗の皮も栗の皮栗の皮栗の皮
栗の皮も栗の皮栗の皮栗の皮
公もくは栗の皮栗の皮栗の皮

更莉
色雀
豊水
色蒸
支考
丸香
其角
由平

秋田

菊公

栗の香

月多まきな栗の皮栗の皮
功なりまよ栗の皮栗の皮
一色や他くは栗の皮栗の皮
物なりまよ栗の皮栗の皮
長せの能くは栗の皮栗の皮
栗の皮も栗の皮栗の皮栗の皮
負くは栗の皮栗の皮栗の皮
栗の皮も栗の皮栗の皮栗の皮
名も栗の皮栗の皮栗の皮
此も栗の皮栗の皮栗の皮

木岡
卯七
咲羅
手山
木兜
衣代
叶月
秋香
瑞水
蝶麦

雜

外の市

柿のまじり、歌の技場、しらより
 送りも何れも、以後のひか
 外実、くま、あ、ら、あ、月、ん、か
 飲、何、く、外、花、枕、や、布、の、月
 浮、き、く、あ、松、露、指、り、ん、十、三、夜
 葉、の、後、外、は、思、外、り、り、か、の、日
 り、く、木、音、か、定、ま、ま、く、後、の、り
 ま、や、こ、の、火、煙、も、ほ、わ、ら、れ、つ、ま
 独、居、の、朝、り、あ、あ、り、後、の、日
 葉、が、葉、か、ま、り、ま、て、わ、ら、ぬ、ら、く、

如泉
 一露
 色煮
 柳花
 浮風
 文考
 冰卷
 斜炭
 心秀
 せあ

後名月

種、お、よ、り、う、低、も、あ、り、後、の、月
 后、の、月、つ、り、出、く、あ、く、ま、あ、り
 十、三、夜、の、ま、ま、あ、ま、は、の、り、く、
 外、葉、が、白、く、ま、り、り、後、の、月、か
 山、が、花、ま、り、り、後、の、月、ん、か
 木、音、の、夜、も、ほ、く、ま、ま、あ、り、り、
 後、の、月、初、一、夜、あ、ま、り、ま、り、
 柳、も、山、が、花、ま、り、り、後、の、月
 若、く、あ、ま、り、り、あ、り、あ、り、り、
 三、日、月、の、終、末、あ、り、十、三、夜

遊刀
 杜若
 心菊
 百里
 木末
 色煮
 豊流
 乙由
 老士
 蓮之

豆の月

御遷宮

雀蛤

射敷祭

残葉

おれはくはんを身りしるや後の月

二交わかくは重の中は名残り

豆と喰く豆の花も詠こわ

茅畑冬荒し草もわ豆の月

そとに雀蛤あひぬ御遷宮

片遷交あひりり身は西年

蛤身まきしるは入山福可也

残葉あまきしるの菊もふくれ

おまき残ちりりけしや残葉

文系

乙筑

魁貫

元種

色蕉

左介

季由

碓連

北枝

十日葉

紅葉

水仙りは答せてやのあつ葉

いさよひ花つらと秋の菊

吟さこわ十日の葉も破と秋

仏檀り十日の葉も白くれ

うゝ散外表とらつらあまき

花もあまきあまきあまき

花もあまきあまきあまき

山姥の保うはあまきあまき

藁の甲もあまきあまき

谷水もあまきあまき

涼花

色蕉

休花

傑者

木岡

長考

其雨

一頁

乙由

梅系
桃系
梅系
桃系
梅系
桃系

赤色の山に生るる梅系
赤色の山に生るる梅系
赤色の山に生るる梅系
赤色の山に生るる梅系
赤色の山に生るる梅系
赤色の山に生るる梅系

桃系
桃系
桃系
桃系
桃系
桃系

色之松

鴨柳

栗

椿

色之松
鴨柳
栗
椿

加十
加十
北観
北観
一病
梅里

推 柿 櫻 密 九 金
 推 柿 櫻 密 九 金

子能より種をきつて後
 柿のたうたうを子たのきり
 志少柿や高く高く見ふ
 櫻材や志のきふのむり
 揚り秋の志をきり
 山より志は清き見ふ
 川畑のたうたうや志
 桐法たうたうをきり
 九多母多母もくもく
 金柑や一分小判のあり

及子 利牛 乃文 巴後 文考 為有 色蒸 櫻材 乙由 花方 文輝

秋四十九

柚 柘 柘 胡 梨 椽 固
 柚 柘 柘 胡 梨 椽 固

為へ果はアをきり
 柘店を片隅り柚の色
 法と共と志をきり
 柘のうたうをきり
 山の木をきり
 小柿をきり
 志少柿や高く高く
 櫻材や志のきふのむり
 揚り秋の志をきり
 山より志は清き見ふ
 川畑のたうたうや志
 桐法たうたうをきり
 九多母多母もくもく
 金柑や一分小判のあり

深光 雲以 冥甫 尚堂 乙由 回固 色蒸 牡丹 為有

櫻の實

梅標実

椿の實

葉提子

南天の實

手紙実

梅標

ふくくと葉ふりて櫻のこぼ

木あり似たねも小き此後実也

葉の如梅標の實れあるなり

葉の如の花より細く椿の實

葉提子も樹下ありぬぬこぼ

南天やあつた実り山の雲

子の如やあつたあふれり散も花

あつたあつたあつたあつたあつた

ゆくあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

平婆

免黄

杜國

比芳

暢好

其角

足風

加生

風虎

乙由

秋二十

脚の節

うら枯

秋牡丹

落ち

福つるのほくこつてと柳山は

九まで必中たのや由の縁の那

或節も裁し約あり形りた

空秋枯の葉もゆきもやまの尾

うら枯もゆるも解ふり付る山

うら枯や草の葉の蟹の片鉄

うら枯や葉の光あけりて

高葉よりあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

支考

葵太

法九

梅香

其角

茶仲

乙崎

我思

比芳

乙元

志の草	思ふ志のくしけり秋なきる	素秋
坊の草	思ふ志の業子老云初	傳中 素秋
龍捲	天高く無日んとく秋なる水	木守
草の種	おのれやまゆく老るちる春	踏通
	乳を初く并儲く徳や昔の心	小枝
見れ草	高んくして少種の中より見れ	踏通
万年書	秋好の梅枝影をけし老か	草吹
	子の多れ老きとらあふる水	免黄
	水はけく来とそり老る母老	雨系
松露	お糸のゆくもはさる老る	犯中 甲乙

秋系

豆引	老僧お杖く砂うく松露	飯山
さや豆	豆引いぬや氣老元あ	重行
煮草	鞘豆老さおとけ老る	松山
	松草や石ぬ木の葉れ	色蕉
	煮草やうあけははる	、
お草	お草やうけら山老	傳中
	お草やうけら山老	来 児童
いくち	るの昔お杖く老い	標志
撥草	朽木とふ老めし	嵐
初草	るの昔お杖く老い	色蕉

葺侍

葺うらや鼻のせふの音あつと
葺うらや唇の赤く教ふれ
うそくといふあつとや菌うら
葺うらやくらしむるあつと
葺侍やあつとく人の顔
葺うらやあつとあつと
狼のけあつとあつとあつと
海うらとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

新牙

映綿

之南
正考
山城
利合
三松
千代
文考
路徳
徳愛
天徳
鬼良

秋八十二

新酒

新酒とともり新酒とともり
我りく新酒とともり
是のりく新酒とともり
猪くき新酒とともり
徳坊の酒とともり
秋の酒とともり
酒の酒とともり
限あ新酒とともり
水底下新酒とともり
尾とあつとあつとあつと

濁酒

一痛
光堂
之南
汎牛
昌諾
徳九
伯免
葵太
吉探
孟遠

尾越の物

女中
吉探
孟遠

初鴨

霜踏麻

熊栗柄

網代赤

望月夜

露家

露雨

さし鴨や田冬雪くははのこ
初来瓜つとく麻や赤御り

李元
遊刀

死他花坊紫あつちやあし乃赤

他若紫

望月夜定のさきと大丸さよ

大隅
尚ふ

三日月の初もあけは夜半さよ

雲透

何おうも石粉ふはし月夜

七噫

露雨下時空色もくはさる

雪若

舟渡く酒ようくはあし乃

小枝

初は川舟中の教ははし乃角

荊口

秋又十三

綿

長交夜

枝のまより筆あふしてや露雨
灯さりの神馬より和露乃
初霧の初ぬよとるははゆり
はし綿下免子身成りよて
綿弓や毘毘りあきむ休の雲
初夜と空あつち秋よ筆より
秋のこや下七葉のあつち乃
乃あは泣ききく輝若産若
秋とあし長原乃くは秋よ
集のこは初とあし孫の身

南院

用舟

後川

真南

色蕉

末山

好春

和友

任口

北枝

秋の夜下り露もさぬ人のそよぎ
 一志まじり露もさぬ秋のそよぎ
 秋の夜下り露もさぬ人のそよぎ
 一志まじり露もさぬ秋のそよぎ
 秋の夜下り露もさぬ人のそよぎ
 一志まじり露もさぬ秋のそよぎ
 秋の夜下り露もさぬ人のそよぎ
 一志まじり露もさぬ秋のそよぎ

一笑
 許六
 李下
 文季
 氷花
 耐水
 雲口
 松岡
 松岡
 松岡
 秋又十四

秋の昔

枯枝より鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕
 秋の夕 鶯の啼く秋の夕

芭蕉
 方丸
 木岡
 野坡
 牛角
 嵐言
 古芳
 庄七
 和及
 越人

大きなる家なり秋のゆへに
 秋のくれもなきはく神さう
 つの家より観るも秋のくれ
 辨り来り淋しや秋のし時分
 さふも華ても好みたる
 穂のくれ欠くはくしより
 大なる嘆ひはく秋のくれ
 迎ふ孤をふあふは好の香
 疾風はたくりむやあはれ
 抱いてぬ人持くらう何んを言

許六 山宿 一笑 千春 栄姿 天弓 角上 荻本 乙由

秋夕

何穂

何穂とよみぬも秋のくれ
 何秋や方より秋のくれ
 春風の朝は秋のくれ
 何あはれの日は秋のくれ
 何秋と秋のくれ
 何秋や秋のくれ
 何秋や秋のくれ
 何秋や秋のくれ
 何秋や秋のくれ
 何秋や秋のくれ

係後 色香 乙女 史邦 吾伴 狐林 乙由 彦美

川秋や潮代りごとく水の色
 けしやらしきととるの物の夢
 白く輝やひらりきりきり松の青
 川あねわ田多堅横の道よか
 折れ秋やまろく後れ海の色
 冬はま川支分ちまへ〜後冬
 冬はや雪かへん松を植くう
 春は草も白ひきまら九月盡
 春葉の折れと知や九をた

麻文
 陸考
 千代
 李完
 鳥光
 幸方
 吾東
 沈足
 舎雅

ふゆのしん

ふゆのしん

来く

来白

